

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第17回 みずのようしゅう 水野葉舟

作家としての才能を発揮

水野葉舟は、明治16(1883)年4月9日、東京市下谷区仲御徒町(現在の東京都台東区)に、父勝興、母実枝の長男として生まれ、本名を盈太郎みちたろうといった。6歳の時、父の仕事の都合で福岡に移住。中学校で級友と教室新聞を発行したことが文学への目覚めとなった。その後、葉舟の名で投稿した詩「長夜吟」が初めて雑誌『文庫』に掲載されると、詩作に没頭するようになった。

上京すると「新詩社」に与謝野鉄幹を訪ね、作詩の指導を受けた。また雑誌『明星』の同人となり、蝶郎の別号で、詩・短歌を発表し新進詩人として活動した。この頃、終生の友となる高村光太郎と出会う。明治34年、早稲田大学高等予科に入学し、新詩社ほう(与謝野)晶子あきこが加わった。やがて葉舟と晶子との関係がうわさされるようになると、そのことで鉄幹に疎まれ、新詩社を追われた。

明治38年、早稲田大学政治経済科を卒業後、丸茂智恵子と結婚し、この頃から『白鳩』『新古文林』などに小説を寄稿した。

葉舟は当初歌人として出発したが、小説などの分野で新しい境地を開き、新進作家として認められるようになった。

大正4(1915)年6月に愛妻智恵子が難産により亡くなると、その追悼のため詩集『凝視』を発刊した。



左／墓の穴(『図説 成田の歴史』より)

右／水野葉舟の歌碑(場所：三里塚記念公園内)

明治16年～昭和22年(1883～1947)

東京市下谷区仲御徒町(現在の東京都台東区)に生まれる。本名は盈太郎。与謝野鉄幹の新詩社に入り、『明星』の同人となる。大正13年に印旛郡遠山村駒井野(現在の駒井野)に墓の穴と名付けた開墾小屋に移り住み、近隣の文学好きな青年たちと七葉会を結成した。



駒井野に移り住む

大正12年9月、画家の伊藤直臣の妹、文子と結婚し、本郷区駒込蓬萊町(現在の文京区)に移り住んだ。文子との間に次男として生まれたのが、元衆議院議員の水野清である。

大正13年2月、42歳の時に東京を去り、印旛郡遠山村駒井野(現在の駒井野)にある小屋に一人移住した。トルストイの思想や高村光太郎の影響により、自然に直面した自己の生き方を求めようと、原野での厳しい生活を始めたのだった。駒井野で暮らしていた葉舟は、地方の文学に寄与することに楽しみを見出していた。地元の教師らによって結成された印旛郡国語教育研究会の顧問となり、『児童文集』の発刊などの指導に当たる傍ら、成田山新更会の機関紙『新更』の選者となり、自らも小説や詩を同紙に発表した。

昭和7(1932)年、7人の文学好きの青年と共に「七葉会(S・Y・W)」を結成し、千葉毎日新聞に欄を設け会員の作品を寄稿させた。後に欄がなくなると、作品の発表の場として、同10年に手書き回覧雑誌『さそり』を創刊した。

昭和21年、葉舟は春ごろから著しく健康を害していたが、その間も歌集『滴瀝』の改版を計画し刊行に向けて進めていた。しかし、その目的は果たせず、同22年2月2日に逝去した。この歌集は同47年10月、有志らの手によって出版された。

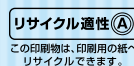
編集後記

表紙の「成田提灯プロジェクト・ナリタノヒカリ」では外国人観光客を取材しました。英語に苦戦する私の隣では、ボランティアの学生が流ちょうに話す姿が。市内でも学生が外国人に道案内する姿をよく見掛けます。私にとって英語の授業はつらかった思い出しかありませんが、3ページで紹介している英語教育のアンケートでは、多くの児童・生徒が英語の授業を楽しんでいると答えていました。何ごとも、楽しむ気持ちが上達への近道なのかもしれません。

平成30年11月15日号 No.1375

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。